

3

日本の敗戦と 開拓団の 結末

敗戦から引き揚げまで (わが一家の足跡)



昭和20年(1945)8月15日(敗戦)

- ・一彦 在満国民学校3年(8歳)
- ・父 7月13日赤紙(根こそぎ動員5万人) 18~45歳
- ・8月17日午後 伝令「敗戦/襲撃」
- ・18日午後 開拓団本部へ集合
- ・18日 夕刻から 逃避行開始

1、逃避行の開始 500人

- 8月18日 夕刻 -

・目的地 明城(軍隊)
・(女・子ども・お年寄り)500人



深夜の豪雨のなかで

・松川団長
「東京開拓団の華と散ろう!」



背中
の赤ん坊
は死んで
いた
路傍に
埋めら
れた



2、連夜の襲撃と逃避

3、集団自決(軍と国からの棄民)・幹部

4、父 捕虜 シベリヤ連行/労役

5、吉林市内 映画館の生活

(9月末 春子の死)と埋葬

12月28日 征夫の死 32日

6、昭和20年冬の生活

(母のたくましさ 一彦大福餅売り)

7、父 シベリアからの脱走敢行

”国と国は敵対するが
人と人は友人になれる”

8、S21 8月17日 帰国開始

(材木運搬無蓋列車 停車 雨 生ジガイモ)

9、胡蘆島(LST/戦車揚陸艦の船底 600人)

佐世保入港 検便コレラ 港外へ隔離1か月

10、10月2日信越線塚山駅着 輝<稲田

(昭和15年12月~昭和21年10月 6年間)

3人のきょうだいと呼んでいる！

◆満洲の凍土で、「私たちが忘れないで！」と泣いている3人の声が、今でも聞えてくる！

「私たちも兄ちゃんたちと一緒にまだ知らない日本へ帰りたかったよ！」

— 小さな胸で叫んでいる声が、今でも聞こえてくる —
(生きて日本に連れて帰れたら・・・)

(生まれた証は何ひとつ残っていない、すべてが灰になっている)

故郷の親兄弟を想い
望郷の涙にむせびながら

**集団自決していった
1万2千500人**
その怒りと悔しさ
その叫び声が 聞こえてくる！

※ この「犠牲」を「犠牲」として
終わらせてはいけない！

満蒙開拓団 —引き揚げのうた—

須田 鉄造

《手記「航跡を追って」より》

引き揚げのうた 須田鉄造

・お国のためと信じつつ 若き血汐を大陸に
捧げる我らに幸あれと 鎮守の森に村人が
祈りて我を見送りぬ

・時は師走の半ば頃 東海山陽ひた走り
関釜の船路鴨緑江 奉天過ぎて新京と
大陸の地踏みにけり

・小城・取柴過去の夢 暑さ寒さが身に残る
苦寒もここに六星霜 吾子等と共に生き残る

・戦い敗れて捕らわれて 悲憤の涙星月夜
異国に残す子等の霊 眠り給えと祈りつつ
別れを告げる浜千鳥

・空の曇りも今日晴れて
故郷の空に野に山に
雨も風も乗り越えて
父母待つ国へ今帰る
再生期して今帰る



須田学級 音楽の時間(昭和27年)

《まとめ》「満蒙開拓」団の 歴史から 何を学ぶか

一次の世代に何を残すか—

国家が総力を挙げて
作り上げた大きな嘘は
いつの時代でも
見破る事は容易ではない
そしてそれに従った
開拓団も義勇軍も
客観的には
侵略者であったという
事実は打ち消せない
国家の政策に純粋に
協力しただけと言っても
この事実は一一人が
責任を問われることになる
国家につくした日本国民は
加害者であって
被害者であったのです

映画冒頭のメッセージ



満蒙開拓団の落日
映画「望郷の鐘」監督 山田火砂子

日本＝「侵略」と「植民地支配」の歴史

「戦争の時代」
・日清戦争(明27～28) 1894～
・日露戦争(明37～38)
・一次大戦(大3～7)
・満洲事変(昭6～7)
・日中戦争(昭12～15)
・太平洋戦争(昭16～20)～1945
**50年間に
5回の戦争**

20年間は「殺し殺される」時代だった。

あの時代に 逆行させてはならない。

ひめゆり部隊生き残り 島袋さん

「今、戦争の感じがします。

でも今なら、まだ止められます。

戦争を知らないことは、恐ろしいことです。

(9年前に証言)

2015-4月2日 夜7時30分 NHKクローズアップ現代

134

(2019年 5年前 沖縄の旅の居酒屋で)

「こんな平和な
世の中なのに
何か胸騒ぎが
するんです」

(戦雲のもと

少女時代を過ごした女性のつぶやき)

”戦争は平和を掲げてやってくる”

(東京大学 加藤陽子教授)

135

「先に生まれたものが
孫、子に残す
最大な贈り物は平和です」

“嘘を見破る賢い人間に”

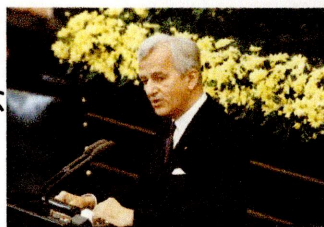
◆「80歳の人間は現代史の目撃者だ」

136

「過去に目を閉ざす者は
現在にも盲目になる」

ヴァイツゼッカー・元ドイツ大統領

1985年5月8日
ドイツ終戦40周年記念
連邦議会演説
「荒れ野の40年」



(1920~2015 1/31 94歳)

シュタインマイヤー大統領

ドイツ降伏75周年記念式典演説



・「過去を思い出すこと
怠れば未来失う」

・「責任を認めることは恥ではない
否定することこそが恥なのだ」

◆「国が動く」とき(満洲への侵略)

- 《歴史から学ぶ》
- ① 政治状況と武力集団の動き
(政党政治の弱体化・軍隊の台頭)
 - ② 国民の生活状態と意識
(農村の疲弊・満洲への期待)
 - ③ 国家体制
 - ・労働組合の戦争体制化
 - ・思想、教育、文化統制
 - ・新聞ラジオの統制/萎縮と戦時体制化
- 今どうか？

※ お話の最後に・残った気持ち

※ 88歳、「歴史」を「記録」し、伝える義務がある。
「過去」を水に流すことは絶対できない。

1、日本の「侵略」を支持し、許した
国民に責任は、なかったのか。

2、「騙された」「知らなかった」「あの時代だから
仕方なかった」で済むなら
また、あの時代に逆行するだろう。

3、「騙されない」賢い人間になること。

「騙される」のは、
こちらに、その素地があるからだ(自覚)。

4、「他人任せ」「他力本願」では
平和は守れない時代になっている。
国民一人ひとりが自分で考え
行動することこそ平和を守る。

(終わりに一曲)

服部良一 作曲(昭和11年)

「祖国の柱」

中国戦線に従軍 最後の戦時歌謡に

142